

北九州市立大学文学部紀要

(人間関係学科)

第 22 卷

目 次

田島 司

自己の多面性が一貫性のある自己へと統合される過程について

..... 17

北九州市立大学文学部

2015年3月発行

自己の多面性が一貫性のある自己へと統合される過程について

田 島 司

Multiplicity of self, self-consistency, and integration process

Tsukasa Tajima

Abstract

In postmodern society, individuals occupy numerous social roles, a concept known as “multiplicity of self.” Some researchers have argued that people with highly multifaceted self-concepts are better able to respond to changing circumstances. However, other researchers have said that self-consistency is an important indicator of successful adaptation and good mental health. In this study, we suggest that multiplicity of self and self-consistency are not contradictory, but can be integrated. When a role is internalized as part of the self, the self gains multiplicity, which may cause intrapsychic conflict. However, recognizing the meaning of that role to the self can help better integrate it into one’s self-concept, thus achieving more effective multiplicity by reducing intrapsychic conflict. The mechanisms pointed out in this study are useful conceptual foundations for future research.

Keywords: multiplicity of self, self-consistency, self-integration

この論文では、自己の多面性という特徴と自己の一貫性を求める傾向とが相反する性質をもつために、自己の多面性が自己に否定的影響をもたらす場合があることをふまえた上で、そのような自己への否定的影響が生じにくい2つの場合があることについて論じた。その一つは、客観的には多面的なようにみえたとしても、自己の多面性として真に成立していないために自己の一貫性を求める傾向と葛藤しない場合であり、そこで関わる要因として役割の内面化を取り上げた。もう一つは、自己の多面性が統合することで一貫性と両立する場合であり、そこで関わる要因として手段性の認知を取り上げた。

自己の多面性と一貫性を求める傾向

自己が外部の環境と関わりつつ適応する過程では、対象や状況に応じて関わり方が変化するものである。例えば、ある対象に接近的な関わり方をする場合もあれば別の状況では回避的な関わり方をす

ることもあるなど、同一の、又は類似した対象や状況であるにもかかわらず自己の関わり方は変化することがある。しかし、環境への関わり方が単に客観的に変化しているということのすべてが自己の多面性を意味するわけではない。本論文において自己が多面性を持つという場合には、同一の、又は類似した対象や社会的状況における関わり方の変動を自己自身で認知することができ、いずれの側面についても自己が関わり方を規定する主体であると考えられていることを指す。

自己の多面性の問題は、関わる対象が明確に特定されていない場合には、性格特性における場面間の変動として自己概念に含まれる問題の中で扱われることもある。Griffin, Chassin, & Young(1981)や榎本(2002)の研究では、複数の対人場面のそれぞれで自己概念が測定され、自己概念が適宜変化していることや、場面に特有の性格特性が含まれていることが明らかになっている。

また、現在の社会には自己の多面性を生じさせやすい特徴があると考えられている。伝統的社会が解体して産業や政治が行われる公的領域と私的領域とに分かれたことや、階級制度、地域社会、職業、家族等の社会的枠組みが流動化したなどの変化により、個人が関わる社会的状況は多様で複雑になり、流動的になったことが1970年前後から指摘され続けている(Bauman, 2000; Berger, Berger, & Kellner, 1973; Giddens, 1991; Klapp, 1969)。このような社会の変化に応じて、かつての社会では考えられなかったような複数の行動様式やライフスタイルが個人内に並存するようになったとされている。いわば、ポストモダン社会における自己の多面性は、多様な人間関係からの要請に対する高度な適応の結果として解釈することができる(岩田, 2006)。

さらに、このような自己が適応的であることを示す実証研究もある。例えば Snyder & Monson(1975)は、自己が社会的状況に適しているかをモニターする傾向の強い個人は、要請される規範に応じて敏感に変化できることを明らかにし、また、大学生を対象とした吉田・高井(2008)の調査では、誠実性が期待されている講義場面では誠実性へと変化しているほど、また、調和性が期待されている雑談場面では調和性へと変化しているほど自己評価が高かった。つまり、さまざまな環境に対して関わり方が変化した態度や行動が柔軟なことは、それを自身が顧みれば自己が多面性を持っていることになるとしても、そのこと自体は環境適応の点からはもちろん自己評価に関しても肯定的な効果をもつのである。

一方で、環境への関わり方に矛盾が無く、自己がまとまりのある一貫したものととらえようとする傾向があることも古くから論じられてきた。例えば Lecky(1945)は、自己の内部の価値には矛盾がなく、一貫した体制を維持できるように行動する傾向があると指摘し、自己と矛盾する外部の価値には同化できずに抵抗したり、さまざまな情動的状态が引き起こされたりするとした。自己を一貫性のあるものとしてとらえようとするこのような傾向と、前述したような、自己が多面性を伴って環境に適応していくこととは、どちらも自己評価やアイデンティティと関わりが深く重要でありながら、多面性を一貫性のある自己へとまとめ上げて矛盾の無い態度や行動をとることが期待されながらそれが困難な場合には、葛藤が生じて自己への否定的影響が生じることになる。その際、特定の対象への関わり方が多面的で葛藤した場合に自己が受ける否定的影響は、多面性に対する違和感や異質感などをともなって一時的に緊張や戸惑いなどが生じるだけでなく、性格特性における場面間の変動がある

程度長期的に葛藤した場合には、精神的健康のさまざまな指標に否定的影響を及ぼす可能性もあると考えられる¹。一時的な葛藤が生じる一例としては、特定の他者と接する複数の社会的状況が切り替わったり入り交じったりする場合である。そのような場合には一貫した行動を遂行することとの両立が困難になり、葛藤による緊張や戸惑いなどが現れやすい。アメリカからの帰国子女の適応を追跡調査した南（2000）によれば、2つの文化のそれぞれで期待される行動や性格へと自然に切り替えることができるようになっていても、日本人とアメリカ人が同時に混在する場面での相互作用では、行動や性格を一貫させることができず戸惑いやすいことを報告し、これをアイデンティティに関わる問題として論じている。また、長期的に葛藤が生じる例として以下のような研究がある。砂田（1979）は、場面間で生じる自己像のずれを測定し、そのずれはアイデンティティの混乱を引き起こす一つの原因であると結論づけている。また、Block（1961）や Donahue, Robins, Roberts, & John（1993）は、複数の対人場面における自己を測定し、自己が一貫しているほど抑うつ傾向などが低く、精神的な適応状態が良い傾向にあることを明らかにしている。さらに Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Lavalley, & Lehman（1996）の調査では、自己概念の内容が明確で内的に一貫し、時間的に安定しているほど、自尊感情が高く神経質傾向が低かった。

自己の多面性の成立と統合の機制

環境への関わり方が変動しやすい一方で自己には一貫性を求める傾向があることから、そこには葛藤が生じやすい。しかしながら、環境への関わり方が客観的に変動したとしても、それらを一貫させようとせず自己への否定的影響が生じにくい場合もある。その一つは、環境への関わり方を統制する主体が内的に帰属されておらず、当該の関わり方が主体的な自己そのもの、本当の自分に基いた態度や行動と感じにくいために、一貫性を求める対象としての自己の一部となっていない場合である。もう一つは、自己の多面性がすなわち非一貫性を意味するわけではなく、多面性は統合されることで一貫性と両立できるからである。これらについて以下の項で順に検討する。

一貫性を求めるようになる自己の多面性の成立

多面的な自己に関連する現象を扱ってきたこれまでの議論では、多面性のそれぞれを、自己の主体性にもとづいた自己そのものとして環境に関わっていると感じる程度が高い場合に限っていたわけではなく、社会的状況に合わせて付け替える多様な仮面のように、自己そのものであると感じる程度がかなり低い場合も含まれていたように思われる。その場合には、一貫性を欠いていようとも複数の関わり方に対してさほど葛藤しない例もあるのではないかと。言い換えれば、当該の社会的状況で求めら

¹ 自己の多面性と精神的健康等との因果関係には媒介する要因の存在も考えられる。佐久間・無藤（2003）は、自己が多面的になることと心理社会的適応との関連は、個人が変化に対してどのような動機や意識を持っているかによって異なる可能性があるとして仮定した。調査の結果、自己の変化に否定的な意識を持っている程度は自尊感情の程度と負の関連があったが、自己の変化に肯定的な意識を持っている程度とは関連が無かった。自己の多面性の肯定性を重視する場合には、一貫性を求める傾向そのものが低くなっていたり、環境への適応を高めるといふ媒介要因も影響する可能性が考えられる。

れる役割を遂行するうえでの言動が自分の主体性によるものと帰属されること、すなわち役割の内面化によってそれを主体的な自己そのものであると感じることが条件となり、複数の関わり方がいずれも自己の側面となるからこそ、それらに一貫性を求める必要性が出てくると同時に葛藤も生じ始めると考えられる。

複数の社会的状況に応じた役割の遂行に一貫性がなくとも、それらの役割が内面化されておらず、主体的な自己そのものであると感じられていなければ葛藤が生じにくいという具体像に思われるものとして、主に学生相談の現場でみられる事例にもとづくものがある。高石（2000）は、「真面目な学生のわたし」と「ストーキングするわたし」のように、まったく異質な自己を含んでいるとしても、それらが断片化しており、一貫性がないことを悩んだり葛藤したりしないという一部の若者たちの特徴を指摘した。また、成田（2001）は、相談室にきたある学生が、「友だちバージョン」、「母親バージョン」、「バイトバージョン」の顔を使い分けるが、そのように自分が変化することを取り立てて悩んでおらず、面接がかなり進んだ後ようやく「どれが本当の自分なのかわからなくなる」と悩むようになる、という例を紹介し、自己の統合を放棄するかのような傾向が増えたという印象を述べている。このように一貫性を欠く自己に葛藤が生じない、自己の断片化ともよばれている現象の存在を指摘するものは少なくない（浅野、2006；土井、2004；桐山、2010；中西、2004；渋川・松下、2010；高石、2009）。

Gergen（1991）によれば、一貫性をもたず場面ごとに断片化していることはポストモダン社会における自己の特徴の一つである。このような特徴を持つ自己の社会的背景として、それ以前の社会に存在していた共同体での永続した安定的な他者とのつながりが失われる一方で、さまざまな技術や交通の発達にともなって関係を持つ他者の数は増加の一途をたどり、個々の関係に深い親密さが薄れていることが指摘されている。他の研究者による議論においても、期待される役割行動をとりつつも、それを自己そのものに由来すると感じずに、役割行動の主体が内面にあると帰属しないような浅い付き合いをしていることが自己の断片化の社会的背景にあると指摘されることが少なくない。例えば高石（2000）は、現代社会では、電子メディアの普及によって遠くの誰かや別の何かといつでもつながることができる反面、身をおくところに心がなく、全身全霊を傾けてその場に関与するという価値もなくなりつつあると指摘した。また、桐山（2010）も、コンピュータや携帯電話などによって知識や情報を必要に応じて取り出すことができるようになり、人間をも取り替え可能なパーツと捉える傾向が出てきたことが自己の断片化の背景にあるという。さらに、電子メディアの普及とは関連させていないが、中西（2004）も、若者の感情が疎外されており他者とのかわりを軽く受け流していることに着目した。感情表出を抑止して自分をそこから切り離しておくことで、「日常のなかでそれなりに振る舞わなければならないしんどさ（p.291）」から免れられるという。

若者の友人関係を検討した近年の調査によれば、互いに深入りせずあたりさわりのないようにふるまうという、いわゆる希薄な関係性が一定の程度で存在し続けており（福重、2006；岡田、2007）、同時に、「空気を読む」などの表現が用いられるように、周囲に調子を合わせて当たり障りのない行動をする繊細な付き合い方に苦慮する姿も指摘されている（浅野、2006）。このような関係性を形成し

ている場合には、その社会的状況で求められることには即応しつつも、実行している言動が本当の自己自身によるものとは感じられず、いわば仮面をかぶって行動するような状態であると考えられる。船津(2006)の行った日本の大学生に対する調査で、親密な他者との関係の中でも「本当の自分でない」と感じる割合が3割程度と顕在化してきていることも、その傍証といえるのではないだろうか。

自己が多面性を持つことに葛藤が生じたり抵抗したりすることが、他者や集団から役割として要請される態度や行動を自分自身によるものとして内面化しているか否かに規定されていることについて、田島(2013)は日常の対人場面において検討した。さまざまな社会的状況での役割に主体的に関与してそれを内面化することと、役割遂行に伴う自己の多面性に対して違和感を持ち始めることが関連するかを以下のように調査した。家族、友人、アルバイト、サークルの4場面それぞれにおいて、役割の内面化(「まわりから期待される行動をする時、あなたはどのように感じますか?」と問い、「自主的に行動していると感じる」などの項目に回答を求めた)の程度と、「多面性への違和感」(「もし『本当の自分』とは言えないような行動をしなければならない時、あなたはどのように感じますか?」と問い、「違和感を感じる」などの項目に回答を求めた)の程度を測定した。その結果、これらの変数は正の関連をもっており、状況別には、家族とサークル場面で有意な正の関連がみられた。これは、役割に主体的に関与してそれを内面化することで、自己の多面性に違和感を持ち始めると考えられる結果である。

手段性の認知による自己の多面性の統合

環境への関わり方が変化しても、それが必ず自己に否定的影響を与えるわけではない場合のもう一つの説明として自己の多面性の統合がある。自己の多面性の統合とは、多面性を一貫性のある自己へとまとめ上げて矛盾の無い態度や行動をとることが期待される際に、個々の側面を無視や否定することで葛藤を緩和させるのではなく、自己の各側面を関係づける新たな原理を加えて全体を一括して認知することであり、統合によって各側面のそれぞれが自分自身そのものであると感じられると同時に、全体が一貫した自分であると感じられて自己への否定的影響が低減することになる。

自己の多面性の統合については古くから議論がある。Simmel(1890)によれば、生活に変化が少なく感情の動揺が少ない場合よりも、個々の感情、思想、活動の変動が大きく、自我と異なる多様で雑多な個人の反応が出現する方が、それらに共通した不動の部分を一段高次から統合するための主観的な人格感が高まる場合があるという。また実証的研究を行ったBernstein(1980)は、10歳、15歳、20歳を対象にして、まず、さまざまな社会的状況において自己の行為がどのように変化するかを記述させ、次に、それぞれの行為に対応する抽象的な自己概念を記述させ、最後に、それらの自己概念を統合して記述させた。記述内容は、自己自身の複雑性を認識しつつそれらに関連づけているかを統合の基準として5段階でコーディングされた。その結果、年齢が上がるとともに社会的状況に即した行動は多面的に分化して表現されており、且つ、統合の程度も高まることが明らかになった。また、多面的な分化と統合との間には正の相関関係があったことも報告されている。このように、自己の多面性が進んだ場合には自己への否定的影響が増すばかりではなく、自己内を統合する自己システ

ム (self-system; Bernstein, 1980) がそこに働くと考えられている。

自己の多面性が統合される際に各側面を関係づける原理として手段性の認知がある。自己が主体的に環境に関わる際に目指す事柄を自己の目的とよぶとすれば、目的を遂げるために必要だと認知される環境への関わりを手段としての関わりとよぶことができるだろう。社会的状況に自己の手段として関わるという認知をここでは手段性の認知とよぶこととする。例えば、それまでは親和的に関わっていたある他者に対して急にいじめるような関わり方をしてしまったことが、その他者の気を引きたいという目的の手段であることを認知することもあるだろう。この場合には、親和的な関わり方といじめるなどの関わり方は多面的ながら統合して一貫性をもつことになる。

田島 (2010b) は、手段性の認知から生じる多面性の統合の様態そのものを検討している。調査対象者には、本当の自分の場面として「あなたが自分自身をそのまま出していると感じる場面」での性格や行動の特徴を記述させ、その後、手段的場面条件では「上で書いた自分とは違う自分を出していると感じる、自分にとって何らかの役に立っている場面 (仕事・活動など)」, 自己共有場面条件では「上で書いた自分とは違う自分を出していると感じる、(仕事や活動などの関係ではなく) その人と楽しく過ごすためだけの場面」での性格や行動の特徴を記述させた。さらに、「両方の自分をふまえて、自分の性格について文章で説明して下さい」と求め、そこで記述された内容を、多面的なそれぞれの側面を無視や否定をせずに新たな情報を加えて関係性を説明しているかを統合の基準として3段階でコーディングしている。その結果、手段的場面条件において、例えば「…のために、その人に…する」のような新たな情報を加えて関係性を説明する記述を含むという意味で、自己の2つの側面についての記述内容の統合の程度が高い群の人数が、統合の程度が低い群の人数より多かった。また、本当の自分の場面とそれ以外の場面との間のパーソナリティの差と、自己の異質感との関連を検討したところ、記述内容の統合の程度が低い群ではそれらに正の関連があり、場面間でパーソナリティの差が大きいほど自己の異質感も高まっていたが、記述内容の統合の程度が高い群においてはまったく関連がみられなかった。

手段性の認知によって自己の多面性が統合するというだけでなく、一貫性を求める傾向との葛藤が緩和されることで自己への否定的影響が低減することを検討した研究はまだ多くはない。手段性の認知が自己の葛藤を緩和する機制について考えるうえで、強制承諾場面における態度変容の研究が一つの手がかりとなるであろう。代表的な Festinger & Carlsmith (1959) の実験手続きは、実験参加者に退屈な作業を経験させた後、本心とは矛盾する「作業が楽しく興味深かった」という態度を別の実験参加者に伝えるよう依頼するというものである。この操作がいわば多面的な自己を作り出している。報酬として1ドルしか受け取らなかった実験参加者は本心である作業の印象そのものを変容させて認知的不協和を減じたが、20ドルを受け取る条件では作業の印象が変容しにくかった。これは、本心とは矛盾する態度を告げるという行為が、20ドルの報酬を得るという手段として、いわば外的な正当性が高い (Gerard, Connolly, & Wilhelmy, 1974) 行為に意味づけられたためだと考えられている。この実験結果から、本心とは矛盾する行為であっても、それが手段的行為として意味づけられると多面性による葛藤が緩和することが示唆される。

また、ある特定の対象への関わり方が多面的である場合に手段性の認知によって葛藤が緩和する事例について報告した研究がある。Schachter(2004)は、イスラエルの大学生を対象とした調査を行い、自己の複数の側面が矛盾する場合の対処の実態を分析している。正統派ユダヤ教徒として教義を守りたいという側面と、教義で禁じられている性交渉を行うことが相反するため葛藤するが、性交渉の経験がむしろ宗教性に肯定的影響を与えると再定義することで矛盾が減じられた例が紹介されている。

さらに、ある特定の対象についての関わり方の場合だけではなく、場面間の性格特性の変動においても、手段性の認知が自己への否定的影響を低減する重要な要因であることを検討したのが以下の研究である。田島(2010a)は、親と関わる場面、友人と関わる場面、アルバイト場面という3種の場面を対象として調査を行った。それぞれの場面における手段性の認知と自己の多面性を測定し、精神的健康への否定的影響として抑うつ・不安の程度を測定した。この変数は他の先行研究でも用いられている自己の多面性による精神的健康への否定的影響の指標である。調査の結果、アルバイト場面が主観的に最も多面的であり、場面に合わせて自己が変わると感じられていた。しかしながら、アルバイト場面における手段性の認知が低い場合にのみ多面性は抑うつ・不安と正の関連がみられ、手段性の認知が高い場合には関連はみられなかった。その傾向は友人と関わる場面においても同様であった。

先述した田島(2013)の調査では、4種の対人場面を対象として、それぞれの場面における手段性の認知と自己の多面性に対する受容の程度も測定している。自己の多面性は、「もし『本当の自分』とは言えないような行動をしなければならない時」を想定させることで操作し、それに対する受容の程度を測定した。あくまでも想定された行動にもとづいた自己の多面性に対する受容の程度を測定したものであるが、抑うつ・不安を測定する場合に比べて、特定の対象への自己の多面性に対する感じ方を直接的に測定したものである。調査の結果、アルバイト場面と家族と関わる場面において、手段性の認知と自己の多面性の受容の程度との間に正の関連がみられた。

以上の研究結果はいずれも、手段性の認知によって自己の多面性が統合されて自己への否定的影響が低減するという考えに沿ったものである。

まとめと今後の課題

自己の多面性の統合には、上述したような認知的過程として手段性を見出して統合するにとどまる場合だけでなく、社会的環境を実質的に変容させて役割間の相互依存的関係を新たに構築する、いわば社会的過程での統合に至る場合があり、それらを区別する必要があると思われる。本稿ではこの点について詳しく議論するには至らなかったが、そのことの手がかりとなるように思われる議論が社会運動論の中にある。この議論を取り上げるのは、役割間関係を変えるよう社会的環境に働きかける具体例として社会運動がよく当てはまるからであり、後述するように、社会運動の動機には、自己の多面性の統合に重なることが多いと考えられるからである。

石川(1988)は、社会運動とよぶ集合行為の基準を、自分たちのアイデンティティやライフスタイルを変えていこうとする「自己変革志向²⁾」と共に、社会制度や社会意識を変えていこうとする「制度変革志向」があることとした。例えば、反民族差別運動や女性解放運動であれば、ある民族に属す

ることや女性が社会的に進出することを肯定的で価値があると自己が認めたい場合、そのような考えを持つ仲間とアイデンティティを相互に承認し合うことで「自己変革」は可能になり、それらが実質的に肯定的で価値をもつように変わるために必要な法律など社会システムの変更が「制度変革」であるといえる。そして石川（1988）によれば、「制度変革」の達成を目指さずに「自己変革」に没頭しても、一定程度はこれを実現できるが、外部集団の実質的な脅威は残されており、完全な「自己変革」達成のためにも「制度変革」達成が不可欠な場合があるという。

アイデンティティを変化させるためには個人の内的な変革だけでは不十分であり、外的な社会システムの変更が不可欠であるという指摘を自己の多面性の統合過程に照らし合わせると、自己変革のように多面性を認知的過程において統合して自己への否定的影響を低減させるだけでは十分でなく、制度変革のように社会的環境における対集団関係の構築や調整が不可欠であるという可能性がある。自己と社会とは表裏の関係にあり、未統合の社会においては自己の真の統合が成立しないということである。自己の多面性と統合におけるこの問題について、理論的検討とさまざまな社会的現象における実証的研究をふまえた議論が今後不可欠であろう。

² 石川（1988）によれば、「自己変革」とは、効用関数ないしは選好順序の変更に伴う選択行動の変化のことであり、換言して、同一の状況において、かつてとは異なる選択を行うようになり、しかもそのような変化が複数の状況にまで及び、さらに、新しい角度から状況と選択を意味づける評価枠組みが形成される、という条件が満たされたときに自己変革が起きたと判断できるという。

引用文献

- 浅野智彦 (2006). 若者の現在 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌：失われた 10 年の後に 勁草書房
- Bauman, Z. (2000). *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity. (森田典正 (訳) (2001). リキッド・モダニティー液状化する社会 大月書店)
- Berger, P., Berger, B., & Kellner, H. (1973). *The homeless mind: Modernization and consciousness*. Irvington. (高山真知子・馬場伸也・馬場恭子 (訳) (1977). 故郷喪失者たち—近代化と日常意識 新曜社)
- Bernstein, R.M. (1980). The development of the self-system during adolescence. *Journal of Genetic Psychology*, 136, 231-245.
- Block, J. (1961). Ego identity, role variability, and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 392-397.
- Campbell, J.D., Trapnell, P.D., Heine, S.J., Katz, I.M., Lavallee, L.F., & Lehman, D.R. (1996). Self-concept clarity: Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 141-156.
- 土井隆義 (2004). 「個性」を煽られる子どもたち 岩波ブックレット
- Donahue, E.M., Robins, R.W., Roberts, B.W., & John, O.P. (1993). The Divided Self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 834-846.
- 榎本博明 (2002). 自己概念の場面依存性について 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 28, 97-115.
- Festinger, L., & Carlsmith, J.M. (1959). Cognitive consequences of forced compliance. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 58, 203-210.
- 福重清 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌：失われた 10 年の後に 勁草書房
- 船津衛 (2006). コミュニケーションと社会心理 シリーズ・情報環境と社会心理 8 北樹出版
- Gerard, H.B., Conolley, E.S., & Wilhelmy, R.A. (1974). Compliance, justification and cognitive change. In L.Berkowitz(Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, vol.7, New York: Academic Press. 217-248.
- Gergen, K.J. (1991). *The Saturated Self: Dilemmas of Identity in contemporary Life*, Basic Books.
- Giddens, A. (1991). *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 (訳) (2005). モダニティと自己アイデンティティー後期近代における自己と社会 ハーベスト社)
- Griffin, N., Chassin, L., & Young, R.D. (1981). Measurement of global self-concept versus multiple role-specific self-concepts in adolescents. *Adolescence*, 16, 49-56.
- 石川准 (1988). 社会運動の戦略的ディレンマ—制度変革と自己変革の狭間で— 社会学評論 39, 153-167.
- 岩田考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌：失われた 10 年の後に 勁草書房
- 桐山雅子 (2010). 現代の学生の心理的特徴 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) 学生相談ハンドブック 学苑社

自己の多面性が一貫性のある自己へと統合される過程について

- Klapp, O.E. (1969). *Collective Search for Identity*, Holt, Rinehart & Winston.
- Lecky, P. (1945). *Self-consistency: A theory of personality*. New York: Anchor Books. (友田不二男訳 (1955). 自己統一の心理学 岩崎書店)
- 南保輔 (2000). 海外帰国子女のアイデンティティ—生活経験と通文化的人間形成 東信堂
- 中西新太郎 (2004). 若者たちに何が起っているのか 花伝社
- 成田義弘 (2001). 若者の精神病理—ここ 20 年の特徴と変化 なだいなだ (編) <こころ>の定点観測 岩波新書
- 岡田努 (2007). 現代青年の心理学—若者の心の虚像と実像 世界思想社
- 佐久間路子・無藤隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, 51, 33-42.
- Schachter, E.P. (2004). Identity configurations: A new perspective on identity formation in contemporary society. *Journal of Personality*, 72, 167-200.
- 渋川瑠衣・松下姫歌 (2010). 大学生における自己の変動性・多面性の概念について—学生相談における臨床的理解と意義の視点から— 広島大学心理学研究, 10, 171-183.
- Simmel, G. (1890). *Über soziale differenzierung: Sociologische und psychologische untersuchungen*, Leipzig: Duncker & Humblot (ジンメル G. 居安正訳 (1970). 社会分化論 社会学 青木書店)
- Snyder, M. & Monson, T. C. (1975). Persons, situations, and the control of social behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 637-644.
- 砂田良一 (1979). 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究 27, 215-220.
- 田島司 (2010a). 自己概念の多面性と精神的健康との関係—女子大学生を対象とした調査 心理学研究 81, 523-528.
- 田島司 (2010b). 自己概念の多面性と統合 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集 368.
- 田島司 (2013). 自己の一貫性と認知的不協和 北九州市立大学文学部紀要 20, 49-55.
- 高石恭子 (2000). ユース・カルチャーの現在 小林哲郎・高石恭子・杉原保史 (編) 大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド ミネルヴァ書店
- 高石恭子 (2009). 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究, 15, 79-88.
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 期待に応じた自己認知の変容と精神的健康との関連：自己概念の分化モデル再考 実験社会心理学研究, 47, 118-133.

JOURNAL OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
(HUMAN RELATIONS)

Vol. 22

CONTENTS

Tsukasa Tajima

Multiplicity of self, self-consistency, and integration process	17
--	----

Published
by The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
Kitakyushu, Japan
March 2015